

## 巻頭言 「オールド・ローズと教会」

宇野 元

オールド・ローズ。多くは、春のみの開花、いくらかは、秋にも咲き、ごく少数が繰り返し咲く。花は小ぶり、花弁は薄く、うつむくなど、押し出しの立派なモダン・ローズに比べて繊細で、奥床しい。また、モダン・ローズがしっかり自立するのと対照的に、枝がしなやかで、家の庭に植えるには支えが必要……

そんなばらたちは、長い歴史を人と共に歩んで来ました。ばらの国といえば、第一に思い浮かぶのは、イギリスでしょうか。それとも、フランスでしょうか。ばらが来た道をふりかえるとき、キリスト教の興味深い役割が浮かんできます。古代から中世、ルネサンスと、疫病や飢饉のとき、また戦乱の時代のなか、ばらたちは教会の庭で栽培されてきました。つまり、古い品種の保護に重要な貢献をしているのです。大航海時代になると、列強のプラントハンターたちが、他の植物とともに、世界各地のばらを自国に持ち帰りました。英国はその代表格でした。フランスでは、あのナポレオンが、ジョゼフィーヌへの愛の証しとして、侵略地からせっせとばらを送り、それらがマルメゾン庭園に加えられました。そんなふうにして、ヨーロッパに集められた世界のばらたちは、人工交配によってさらに新しい品種を生み、やがて大量生産の時代に入ると古い品種はかえりみられなくなってゆきました。けれども面白いもので、そうした流れの陰にオールド・ローズを愛する人々があり、失われたはずの品種が、教会の修道院や墓地のなかで見つけられます。そののち、20世紀にオールド・ローズは驚きをもって迎えられました。モダン・ローズに親しんでいた目に、非常に新鮮に映ったわけです。また、各時代のばらをもつ独自の美しさへの正当な評価をもたらしました。

古いものが、新しい！ このことは、主の羊たちの群れの歩みを考えるときにも、おぼえておきたい真理ですね。宗教改革 500 年、そして芦屋教会の伝道 70 年を迎えるこの秋は、私たちが教会の歴史を心にとめるのにふさわしいときです。あるいは「再発見」するのに。振り返れば、どれほど多くの恵みの賜物が与えられていることでしょう。また、同時に、現在の歩きをもつ意味をも自覚したいものです。それは、さらなる新しい品種への単なる「途中の花」ではなく、「もっと新しい花」によって取り替えられない、かけがえのない豊かさを与えられています。